

山麓探偵団通信

6月号

三か月ぶりの探偵団は、五月二十七(金)、九名の参加者をもって再開されました。

記念すべきその日、90パーセントの降水確率を、見事くつがえした快挙、思いがけず、野外を歩くことができました。

▼参加者の感想文

山麓探偵団にはじめて参加しました。雨のため、森の喫茶室あみんにて、伊藤浩美氏のレクチャーということで、「サイエンスチャンネル」『バイオニア植物』『富士山の植物』など、伊藤カメラマン撮影の映像を見ながら、食虫植物の虫を誘い入れるしかけ、蜂の結婚飛行の同日開催の不思議、絶滅危惧種のことなど、興味深いものでした。自然の遷移と違って、生物多様性が損なわれる、人による急激な環境破壊が、結果として、人が適応できない環境変化を導いてしまうことなど、印象的でした。

午後は、新緑の中、約1000年前の噴火口、富士吉田の「雁の穴」周辺の観察会。「マムシ草」「ウツギ」「ワラビ」「フタリシズカ」「野生のサクランウ」一度教えてもらおうと探しやすくなる目。

樹の上の、大きなノスリの巢。親鳥の声から、ヒナがいるらしいことが判明。

また、雁の穴では、三角の溶岩流跡と、溶岩樹型。崩れ穴と暗闇の壁にコウモリの親子。静かに自然が息づいていました。(Y・T)

▼特別寄稿

今月は、アルピニストの戸高雅史さんに、随想をお願いしました。

私はこれまで、ヒマラヤの高峰登山を通して、いつ、なにがあってもおかしくない極限の世界を生きてきました。雪崩、落石、吹雪、高度障害・・・そこは限りなく死と隣り合わせの世界でありながら、その紙一重の境を見極める上での抛り所を、一瞬一瞬の自身の身体感覚や感性に置くことで、不思議と安心感を持って行動することができました。外界にふれるセンサーである身体は、あたかも無垢な感光版のようであり、わずかな光も感得し、反応します。ところが動く瞬間も、危険の兆候さえも。なにかしっくりしないという違和感が、引き返すタイミングを知らせてくれたこともありました。必要なきにはもちろん、意識にスイッチがはいります。私にとって、自分の身体こそが、抛りどころでした。

しかし、大震災以後、自分の立ち位置は揺らぎました。時間経過とともに明らかになる甚大な被害の衝撃、原発の先行きの不安。放射能の情報に対する懐疑とどこかしき、メディアからあふれてくるメッセージの影響・・・身体感覚をはなれ、どうしたらよいかという意識の世界での葛藤がつづきました。野外学校の大半は中止し、しばらく家族で実家の大分へ行きました。今の自分には何が大切なのかを問い、身体でとらえられない恐怖を素直に受け入れた行動でもありました。高速道路を西へ向かい、関西圏に入ったとき、すうつと身体もこころも軽くなってゆきました。ああ、こんなにも張り詰めていたんだ。大分では毎日、三匹の犬たちと野山を駆け回り、かけがえのない普通の暮らし、そして家族がともにあるよろこび。しかし、意識の世界での葛藤は、消えませんでした。

四月中旬に、北海道知床山脈の原生自然のなかを歩きました。ヒグマの森に泊まり、道なき雪山の尾根を一瞬一瞬の感覚で歩く。次第に意識で作りに出す世界が静まり、あるがままの自然と融合してゆく五日間。「私自身のいま、この瞬間」がすべて。あらためて、そこに立ち還る体験でした。言葉がなく、瞬間性に満ちた自然は、その実感の機会が満ちているように思いま

す。探偵団の皆さんとも、そうした場を一緒にできたらと願っています。

六月三日 戸高雅史

▼六月の探偵団活動ご案内

今、あるがままの自然の中で！

(8名限定の一泊二日間)

☆

今回は、アルピニストの戸高雅史さんを団長に、探偵団ではじめての地に足を踏み入れます。

・六月二十五日(土) から翌日の二十六日までの一泊

・集合朝9時 森の喫茶室あみん解散は翌日の午後

・参加費 8300円(保険・ガイド・三食食費・貸与の代金すべてを含みます)

・持ち物 当日の昼食・おやつ・着替え・シュラフ(貸与可)・銀マツト・雨具・食器・防寒着・なお、ヘルメット、安全ベルト、沢シューズは貸与。

*申し込み・問い合わせは、お早めにお願ひします。

◎次回は、七月二十三日(土)、山中湖大平山付近を、昆虫の林正美先生に団長をお願いする予定です。

発行 山麓探偵団 事務局
山梨県山中湖村平野一六九八
電話 〇五五五・六五・七〇二三